

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：30102

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18663

研究課題名（和文）「ノンエリート大学」に学ぶ学生の「生き直し」をめぐる哲学的研究

研究課題名（英文）Philosophical approach to qualitative research "Relive" for "non-elite" university students

研究代表者

荒木 奈美（Araki, Nami）

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：20615182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師が「文学作品に描かれた解釈の分かれる問い」に着目し、直接学生と対話する経験の中で、学校教育で何らかの生きづらさを抱えてきた学生たちの本音を引き出すものである。言葉にしがたい思いを抱えて生きる学生たちの、簡単には表現し得ない言葉の本質をつかむためには、学生たちの表面上の言葉を受け止めるだけでは限界があり、何より教師が学生を前に、自身も言葉にしがたい思いを抱えて生きる一人の人間として学生の前に立つことが肝要であるという実感を得た。また人が無意識の感情を芸術活動によって引き出す表現アートセラピーの方法は、教師が学生の言外の思いを引き出す有効な手段となりうるという知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「文学作品に描かれた解釈の分かれる問い」に着目しながら繰り返し学生たちとの対話を続けてきた報告者は、普段の授業では見せない学生たちの「本音」や言葉にしがたい複雑な思いと出会う貴重な経験ができた。彼らの言外の思いを受け止めきれず研究が暗礁に乗り上げることもあったが、表現アートセラピーの知見を得て、言葉を介して理解しあうのは別の対話の喜びと出会い新たな境地を得た。また学生たちの「生きづらさ」と真摯に向き合うためには、教師自身が自分をこまかさずに自分自身の問題と向き合う姿勢が不可欠であるということにも気づいた。

研究成果の概要（英文）： In this report, I focus on students who feel like being hard to live thorough youthful days. As a college teacher, talking with each other about book, manga, anime and J-pop etc... I bring out their honest feelings.

I realize that in order to deepen mutual understanding it is not enough with only superficial contacts in relationship between student and teacher, it is necessary for us to talk our own mind to each other. In addition to it, It has been found that 'expressive art therapy', which works on unconscious feelings by expression activity, is effective for bringing out their honest feelings.

研究分野：臨床教育学 教育哲学 若者文化論 文学教育

キーワード：質的研究 ナラティブ的探究 臨床教育 大学教育 現代若者論 若者文化 自己形成 文学教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学での授業における文学教育研究の一環として、「文学作品に描かれた解釈の分かれる問い」に対する学生一人ひとりの考えに着目しながら、学生たちとの対話を続けてきた。その経験の中で報告者は、学生自身がこれまでの自分の生き方を肯定できる「自己承認」の問題に働きかけることの重要性を実感し、「今この大学で人知れず生きづらい思いを抱えて生きている学生がいるなら、教師自らが直接働きかけ、学生の声に耳を傾け、彼らが自分の生き方を肯定できるような問いかけをしてみたい。その経験の中で見えてくる実感から、今学生たちが大学教育に求めていることの一つを実践研究の中から発掘してみたい。」と考えるようになった。

(2) 研究開始当初、報告者が本研究によって明らかにしたいことは下記の二点であった。大学生活の中で何らかの「生き直し」をしようとする学生を研究対象とし、彼らの作品解釈および直接の対話から見出された「質的变化」を、ポール・リクール「自己性 ipseité」(Ricoeur, 1985 1990)を方法論的基盤として「いまだ語られていないこと」から探ること 2年にわたる授業実践とその記録を通して事例を積み重ねることで得た研究成果を国内外に公表すること

2. 研究の目的

本研究は、報告者自身が大学生と直接対話し、学校教育の日常で語ったことや書いたこと、ふるまいとして見せたことだけでなく、「文学作品に描かれた解釈の分かれる問い」に対する学生一人ひとりの考えにも目を向けながら、学生の「語られない」ところに目を向けることによって、教師自身が学校教育の中で何らかの生きづらさを抱えながら苦しんできた学生たちの生きづらさの本質を引き出すことを主たる目的としている。対話では「未だ語られていないこと」「うまく語れていないこと」の方に着眼し、彼らがその中で繰り返し語る「前」から引き出した新たな視点が、彼らの「生き直し」に結びつき、それが彼らのその後を生きる支えとなっているという視点を中軸に据える。その上でポール・リクール「物語的自己同一性 identité narrative」「自己性 ipseité」概念の観点から捉え直し(Ricoeur 1985)、その理論的基盤を構築することで、質的にその成果を積み重ね、最終的に研究成果を国内外に公表することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 授業研究

報告者の授業で得られた学生との対話分析は、克蘭ディニン(Clandinin 2000)のナラティブ的探究を授業リフレクションに応用した独自の方法を取る(荒木 2016, 2017)。対象となる授業では、200名程度の学生と授業者(報告者)が講義の中で「間接的に」対話をする。用意する文学作品の選定規準は、作品の中に正解を一つと定めず、解釈の分かれる問いを立てられる領域(授業では「もやもや」と表現)を学生に提供するものと定めている。授業者はこの授業を終えた後、学生の意見の中から「生き直し」に類するものを抽出し、その学生の他の授業回のレポートも参照しながら、気になったことを書き出しておく。他の参加学生に共通するような内容が書かれていた場合は、翌週の授業で配布資料として全員に向けて紹介することもある。その紹介が他の学生の「生き直し」につながることもある。そのようにして得られた授業をめぐる間接的な対話の流れを、個人的な記録と授業記録の両面から書き留めることを授業研究では重視する。

(2) 学生調査

授業研究の中で気になった学生がいた場合、時間をかけて対象学生のライフストーリーを問いつつながら、彼がどのようにして大学生活の中で自分にとっての「生き直し」をしているのかを確かめるインタビューの機会を設ける。学生一人ひとりのケースを丁寧に聞き取りながら、質的なデータを積み重ねる。インタビュー分析は、西村(2014)の現象学的方法を用い、分析する報告者自身の気づきをもとに対象学生に問いかけることで発言の本質を引き出していくことを目指す。これまでの調査では、話を聴く側の問いかけが対象学生の経験と本質的に重なった時に内容が動いた。聴く者が語る学生に深く関心を持ち、彼らの経験を引き出す真摯な問いかけが大前提という意味で、聴く側の人間的な質を問われているということも実感している。

4. 研究成果

(1) 授業研究については、結果として一つの授業に絞り(臨床教育学入門)、3年間を通じて定点観測的に調査を続け、その成果を日本臨床教育学会に継続して報告した。平成29年度は「授業の中で教師になるということー臨床教育学入門 2016-2017 教師の「指導性」の意味を再発見する」(日本臨床教育学会第7回大会 2019.9)、平成30年度は「授業の中で教師と学生が学びあうということ 「わからなさ」にみちた世界の中で 教室 という場の持つ豊かな意味を問い直す」(日本臨床教育学会第8回大会 2018.7)、平成31年度は「教師と学生の学び合いがもたらすストーリーの書き換えと問題の気づき 「臨床教育学入門」7年間をめぐるナラティブ的探究報告」(日本臨床教育学会第8回大会 2019.10)として、報告者が3年間にわたる当該研究活動で学生理解を深めた過程がはっきりと可視化されている。一番の成果として上げるべきは、言葉にしがたい思いを抱えて今を生きている学生たちの、簡単には表現し得ない彼らが発する言葉

の本質をつかむためには、まずただ書かれたこと、言われたことを受け止めるだけでは限界があること、であればこそ教師は学生を前に、ロジャーズの言う意味における「人間になる」(Rogers, C. R. 1961)過程のさなかにある一人の人として、自身も言葉にしがたい思いを抱えて生きる一人の人間として学生の前に立つことが肝要であることに実感として気づくことができたとあるだろう。

(2) 学生調査については、平成 29 年度秋学期(9 月)に学生を募り、10 名の学生を対象を限定し進めていくことになった。途中メンバーの交代もあり計画通りにはいかないところもあったが、計画通り平成 30 年度まで断続的に聞き取りを続け、一人の学生の生き直しにまつわる対話記録を大学紀要としてまとめるに至った(「大学教育のなかの「開かれた学びあい(アクティブ・ラーニング)」をめぐるナラティブ的探究(2)：学生との家族をめぐる対話から見えてきた『新しい物語』』)。平成 31 年度にまとめる予定であった研究成果については、現在執筆中であり、令和 2 年度中の公表を目指し準備を進めている。

(3) 学生との対話を支える方法論についての構築については、本研究スタートの当初はリクールが明らかにした「自己性」概念からの検討しか考えていなかったが、言葉にしがたい思いを抱える学生たちと時間をかけて対話を続け、少なからず当該学生に何らかの「生きづらさ」に該当する思いがあることに気づいたとしても、それを形にして示す方法がなければ、研究としては何も生み出せないというジレンマに陥り、一時期研究が暗礁に乗り上げてしまうという経緯があった。学生たちが対話の中で自身の「自己性」(自分でも気づかなかった思いやわだかまり)の存在に気づいたとしても、それをただ気づくだけでは何も生み出さないどころか、むしろ彼らにとっては不安の一大要素になったまま重くのしかかる。実際にそのことで学生たちを苦しめてしまうことにも繋がった。その経緯もあり、藁にもすがる思いでたどり着いたのが、本研究の後半に多くの時間を費やした表現アートセラピーである。その概要については次項にまとめて示す。

(4) 表現アートセラピーは、人が無意識に仕舞い込んだ感情を芸術アート活動によって引き出す芸術療法の一つである。引き出された感情に対しては、時に言葉を与えながら、時にその芸術の形のままだ、自身の言葉にしがたい思いについて他者と共有することを可能にする方法論を持っている(Rogers, N. 1993)。報告者が当該活動に着目した第一の理由は、この表現アートセラピーが感情の可視化に資する要素に他ならない。しかしながら今回、報告者自らがこの活動に身をもって触れ、肌身を通して実感したことは、教師としての自分自身のふるまいに対する省察に他ならなかった。その気づきは研究成果「大学教育のなかの「開かれた学びあい(アクティブ・ラーニング)」をめぐるナラティブ的探究(1)：表現アートセラピー体験から得た、教師が学生と『対話的』に関わることの意味」(『札幌大学総合研究』第 11 号 2019.3)として大学紀要にまとめた。また 1 年を経てこの経験をさらに問い、得た実感を「本音を出せない社会のなかでわたしの「挑戦」的授業実践」(『教育』教育科学研究会編集 かもがわ出版 2019.3)に著した。

しかしながらこの過程の中で明らかとなったことは、まさに本研究における前提を大きく揺るがすことでもあった。そもそも本研究は、今ここで「何らかの『生きづらさ』を感じて生きている学生に、教師自らが直接働きかけ、学生の声に耳を傾け、彼らが自分の生き方を肯定できるような問いかけをする」ということを出発点としていたが、そのためには何をあててもまず教師自らが学生の前に心を開き、ただその思いを他者と共有することができなければ、その先には決して進むことができないということである。つまり、本研究の前半で学生との聞き取りが頓挫し先に進めなくなった原因は、報告者自身のあり方の問題にあったということになる。「学び続ける教師」が教育学研究の世界において取り沙汰されて久しいが、この先も学生に寄り添い、彼らの言葉にしがたい思いを引き出すことを続けていくのであれば、教師自身がまずは学生の前に真摯に心を開き、自分自身の言葉にしがたい思いと向き合うところからはじめることが不可欠であるということが、報告者自身の実践経験を通して可視化されたということになる。

<引用文献>

- 荒木奈美(2016)教師が自分の実践をどう振り返るか 学び続ける教師の自己リフレクション方法について問う(上)『札幌大学総合論叢』第 42 号
荒木奈美(2017)教師が自分の実践をどう振り返るか 学び続ける教師の自己リフレクション方法について問う(下)『札幌大学総合論叢』第 43 号
Clandinin, D. J.(2000) Narrative Inquiry, Jossey-Bass
松葉祥一・西村ユミ(2014) 現象学的看護研究 理論と分析の実際, 医学書院
Merleau-Ponty, M.(1945) Phénoménologie de la perception, Gallimard
Ricoeur, P. (1985) Temps et Récit 3, Edition du Seuil
Rogers, C. R.(1961) On Becoming a Person, Houghton Mifflin
Rogers, N. (1993) The Creative Connection: Expressive Arts as Healing, Science & Behavior

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 荒木 奈美	4. 巻 11
2. 論文標題 大学教育のなかの「開かれた学び合い（アクティヴ・ラーニング）」をめぐるナラティブ的探究(1) -表現アートセラピー体験から得た、教師が学生と「対話的」に関わることの意味-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 札幌大学総合研究	6. 最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） SULB00001011.pdf	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 荒木 奈美	4. 巻 47
2. 論文標題 大学教育のなかの「開かれた学びあい（アクティヴ・ラーニング）」をめぐる ナラティブ的探究 (2) -学生との家族をめぐる対話から見えてきた「新しい物語」-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 札幌大学総合論叢	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） SULB00000981.pdf	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 荒木 奈美	4. 巻 890
2. 論文標題 本音を出せない社会のなかで わたしの「挑戦」的授業実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒木 奈美
2. 発表標題 文学教育の可能性を臨床教育学的観点から問い直す 生き方に迷う若者と教師の対話が生み出す「意味」に着目して
3. 学会等名 日本臨床教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 荒木 奈美
2. 発表標題 授業の中で教師と学生が学びあうということ 「わからなさ」にみちた世界の中で 教室 という場の持つ豊かな意味を問い直す
3. 学会等名 日本臨床教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒木 奈美
2. 発表標題 教師と学生の学び合いがもたらすストーリーの書き換えと問題の気づき 「臨床教育学入門」7年間をめぐるナラティブ的探究報告
3. 学会等名 日本臨床教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考